

オリガミアンだより

サシサシ 第34号

2021年8月10日発行

きつね

と

たぬき

秋がもう目の前に迫っていますので、「きつねとたぬき」の折り方の復習をします。

「きつね」はステイホームでNHK教育テレビの録画を整理中、「折り紙の魔女と博士の四角い時間」（2020年12月12日放映）に出てきたものです。シンプルで実に可愛い!!

「きつね」と言えば「たぬき」です。40年近く前に教えてもらった作品が残っているのでは? とスクラップ・ブックを繰ったところ、ありました、ありました!!

この際、「きつね」と「たぬき」をセットにしてご紹介してしまおうーと某日、折り方を懸命に研究。何とかメドがつかしました。

今後、もう一度、教室で取り上げます。お楽しみに。



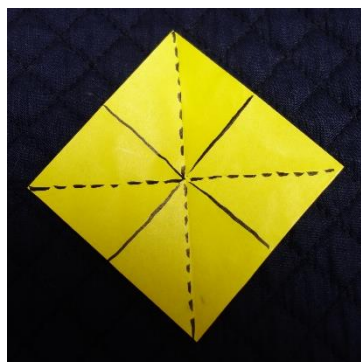
「どうして干支に猫がないんだよ、シャー」
「そ、そんなことボクに言われても…。モウ困っちゃう」
動物写真家 岩合光昭さん撮影

たぬきは胴体が1辺15センチ、頭はこの紙を4分の1にカットして作ります。これに今回のテーマのうさぎが加わると…

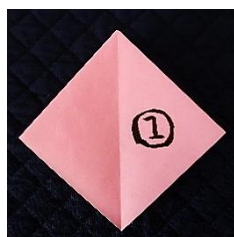


「コーン」「ポンポコ」。明るいお月さんの下、“2人”の会話は朝方まで続きましたとさ。

たぬきの胴体



鶴の基本から入る



折った線に沿って4分の1に畳む



見本のように中心部まで折り上げる



もう一度上へ折る



④⑤のように折ったものを中へ折り込む



腹の部分完成



⑥を裏返す



鶴を折る要領で





黒の斜線部分が隠れるようにさらに折る



2カ所折り首の部分をつくる

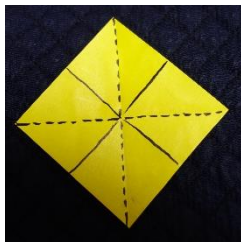


前脚部分を引っ張り出す



尻尾をふっくらめに作って胴体部分は完成

たぬきの頭



胴体と全く同じ折り方



胴体の4分の1の紙で折る。先に①のように折っておく



③上へ折り上げる



④のように顔、鼻の部分を作る



⑤で頭頂部分を後ろへ折り曲げて完成



頭と胴を接着して完成。前脚を両側から挟むとおなかをポンポコするポーズになります

山田茂丸さんの思い出と手紙

「たぬき」の考案者は木村良寿氏、折り方を教えていただいたのは西宮市在住だった山田茂丸さんと記憶する。明石市立図書館で折り紙教室があり、その時、講師として来られご指導いただいた。昭和 57 年（1982）9月 21 日の日付が残っているから今から 40 年近く前のことだ。山田さんは西宮市役所勤務が長く、市民相談課課や公民館長を歴任されたとご本人から伺った。当時のご自宅に電話を入れてみたが該当はなかった。当時 68 歳と聞いたからご健在なら優に白寿を超えておられることになる。

その後、私の東京勤務時代に手紙のやりとりをした。せっかく習得した「たぬき」の作品を紛失、これを送っていただくために手紙を書き、近況も添えた。ちょうどオーストラリア取材を終え、通産省（当時）の広報誌に寄稿したもの（『折り紙つきの楽しさ』）を同封した（4 ページに当時の資料を掲載）。

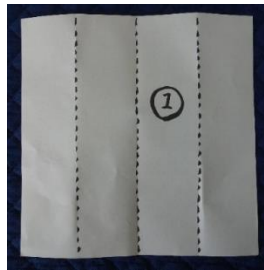
それに対する山田さんの手紙の一部を紹介しよう。「『折り紙つきの楽しさ』を読ませていただき、折り紙は本家（日本）より外国で一足先に高く評価されていることに驚きました。つまり、こうした評価には紙があればちょっと折ってみたいくなるということが国際的オリガミアンを輩出したのではないだろうかと思っています。

外国でうけるパズルの要素を、形を変えて日本の学校現場でとりいれてくれるよう願っています。

（中略）タヌキは“他を抜く”ということからポピュラーな作品としてよこばれています。国際手芸として見直される折り紙に自信を得て精進したいと思います」



ボクが見本。上手に折ってね



谷折り線を3本つくります



②図のように中へ織り込み三角形を3つ（大2つ、小1つ）つくります



切れ目のない方の面で③図のように折る



顔の部分を引っ張り出す。尻尾は大きな中割れ折り。耳と顔の部分に指を入れ、ふっくらと



可愛いきつねが登場。折り紙博士も出来上がりに満足そう

きつねを折る時は1辺を12センチくらいにすると、たぬきとの釣り合いが取れます

きつねとたぬき どちらが好き？

きつねとたぬき。鹿、猿、熊などと並び、どちらも、かつては人間のすぐそばにいた可愛い動物たちです。皆さんは、きつねとたぬきに対してどういった印象をお持ちですか。私は「たぬき」というと真っ先に証城寺の狸囃子を思い起こしますが、何か人間にはあまり関わりなく狸たちだけで騒いでいる感じ。それに対して「きつね」はどこかずる賢くて油断のならない気がしますが、お稲荷さんのお使いとして鎮座したり、新美南吉の『ごんぎつね』の主人公になったりで、私たち人間の生活にしっかり関わっているように思えます。

地域によって大きく違う麺類の呼び方

「きつね」や「たぬき」を冠した麺類はたくさんありますが、地域によって大きく違うことは皆さん、ご存じですね。関西人である友人に聞いたところ、「きつねうどん」は砂糖で処理した厚揚げを乗せてあり「では、たぬきは？」ということになり、揚げを入れたものを「たぬきそば」と呼ぶようになったとか。「たぬきうどん」という言い方はないそうです。揚げを細かく刻んだものが入ると「きざみうどん」ですね。飲食店では「きつねうどん」は「しのだ」と呼ぶことが多かったようです。

この同じ友人が学生時代、京都で「たぬきそば」を注文したら、うどんに揚げを乗せてあんかけをしたものが出てきてびっくりされたようです。同じ関西でも違うんですね。

私は愛知県の東半分・三河の出身ですが、何も乗せない「素（す）うどん」はあまり見かけなくなり、「たぬきうどん」（他を抜き天カスのみ）、「きつねうどん」（ただの揚げを乗せたものと、厚揚げを乗せたものの2通りある）、「たまごとじ」「天ぷらうどん」と生活が豊かになるにつれ、次第にグレードが上がっていったように覚えています。

皆さんのふるさとでは、麺類の呼び名で、どんなユニークなきつねさんやたぬきさんがいるのか、ぜひ教えてください。

カンガルーの国の折り紙

神戸新聞東京支社 熊谷信哉

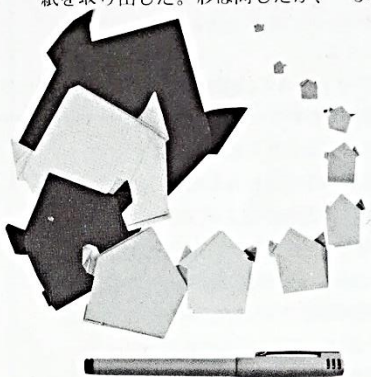
「これをあげる。日本へ持ち帰って」
無言だったが、十歳の少女タマラちゃんの目はそう言っていた。ややはにかみながら手渡してくれたのは、なんと折り紙だった。

オーストラリアの南岸にあるアデレードで取材中のこと。日本の自動車メーカーの現地従業員のナマの声を聞こう、とある家庭を訪れた。相棒の記者は自分の分担範囲なので熱心にインタビュー中。私はしばしの息抜きと決め込んで、タマラちゃんと弟のアンドリュー君(8歳)を相手に居間で遊び出した。

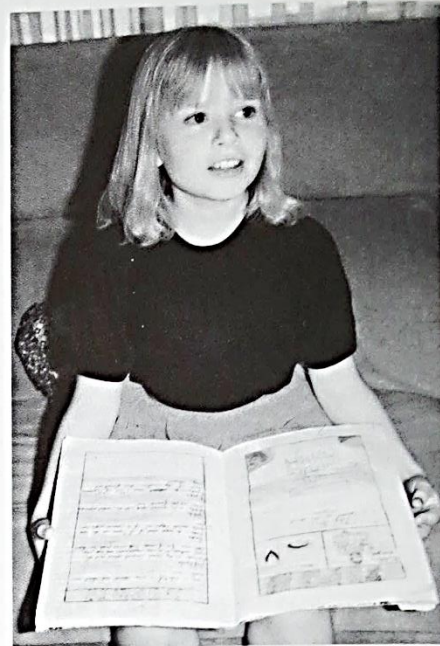
この時、私が披露したのが日本の折り紙。笠原邦彦氏考案のパンダや伝承作品の折り鶴などを二人の目の前で折って見せると、何とか覚えようと、が然二人が身を乗り出してきた。身ぶり手ぶりで交えての汗だくの説明。いつしかお互いの間に横たわる言葉の壁も消えた。動物という万国共通のものを素材にしたためだろうか。姉弟の手でパンダと折り鶴が曲がりなりに完成した。私にすっかり心を聞いたアンドリュー君は、どこで習ったのか紙ヒコキを作ってくれた。多少ちやちやなところはあるが、意外によく飛ぶ。こちらも童心に戻って三人でしばし遊んだ。

タマラちゃんが「日本へ持ち帰って」との願いを込めて例の折り紙作品を差し出したのはこの直後のこと。緑色の紙を使い、長辺が約8cm、短辺が約6cmの変形五角形。この一部から前脚らしいものが二ヵ所突き出している。手に取ると厚みを帯び、ひっくり返すと後脚らしいものもついている。伝承折り紙「びよんガエル」にそっくりだ。

「だれが教えたのかな？」とびっくりしていると、タマラちゃんがカエルの腹部を左右に開いて中からピンク色の折り紙を取り出した。形は同じだが、一まわ



▲タマラちゃんが丹念に折ったカエル。日本の女の子も顔負けだ。



▲タマラちゃん。学校で習った日本についての記述を見せてくれた。

り小さい。同じようにしてお腹の中から次々に子ガエルたちが飛び出てきた。「カエルの子はオタマジャクシ」という日本の発想とはやや違うが、私の目の前に親ガエル、子ガエル、孫ガエルなどがズラリと並べられた。最後に姿を現した12個目のカエルは何と長辺6mm、短辺5mm。この超ミニガエルも手抜きせず、きちんと折ってあった。材料に使った1対2の紙はタマラちゃんが自分で切ったものだった。

『おりがみ』No.153 日本折紙協会発行 1988年(昭和63年)5月1日発行

日本の折り紙に高い関心

誌面の都合で掲載できなかったが、上記「タマラちゃん」の記事の下半分はオーストラリア出張取材余話を載せている。以下、その中から抜粋してみよう。

オーストラリア出張時にちょっとした手みやげとして日本折紙協会発行の『4カ国語おりがみテキスト』と、折り紙セット(海外では当時、正方形の紙は入手しにくかった)を持参し、取材するたびに配った。アデレード沖のカンガルー島を車で案内してもらっている時、同行した案内役グラハム・リーズ氏の娘が退屈しだした。「気分転換にでもなれば」と『4カ国語おりがみテキスト』を手渡すと、ほどなくカエルを折り上げた。全く予想しなかった反応にびっくりしたのは言うまでもない。

年末にオーストラリアから一通のクリスマスカードが届いた。パース沖のインド洋に浮かぶロットネスト島の管理官トニー・ガンダー氏からだった。中からは何とパンダの折り紙が出てきた。プレゼントした黒い紙で何度も失敗しながら折ったらしい。私が教えたのとはちょっと違い、足先の部分に工夫が凝らしており、コアラに似ているような気もした。「“オーストラリアン・パンダ”です。いただいたおみやげを、いとおこと二人で楽しんでいます」と文面にあった。

当時、オーストラリアは建国200年祭に沸き返り、日本からの観光客も多かった。空前の日本ブームが起き、「日本とはどういう国なのか。私も行ってみたい」というオージー(オーストラリア人)も多かった。私が実感した折り紙への高い関心も、こうした雰囲気の一環だったような気がしている。